

自然居士

觀阿弥作

季は	地は	狂言
	始は山城	東山の人
雜	後は近江	シテ 自然居士
		子方 女児
		ワキ 人商人
		ワキヅレ 同

「かやうに候ふ者は。東山雲居寺のあたりに住居仕る者にて候。こゝに自然居士と申す喝食の御座候ふが。一七日説法を御述べ候。今日結願にて御座候。皆々参りて聴聞申し候へ。

シテ詞

「雲居寺造営の札召され候へ。夕べの空の雲居寺。

月待つ程の慰めに。説法一座述べんとて。導師高座に上り。発願の鉦打ち鳴らし。慎み敬つて白す。

一代教主釈迦牟尼宝号。三世の諸仏十方の薩埵に

申して白さく。總神分に般若心経。や。是は諷誦を御上げ候ふか。

狂言
「実に是は美しき小袖にて候。急いで此諷誦文を御覧候へ。

シテ

「敬つて申し受くる諷誦の事。三宝衆僧の御布施一
裏。右志す所は二親聖靈頓証仏果の為め。身の代
衣一重。三宝に供養し奉る。彼西天の貧女が。一
衣を僧に供ぜしは。身の後の世の逆縁。今の貧女

は親の為め。

「身の代衣恨めしき。く。浮世の中をとく出でゝ。

先考先妣諸共に。同じ台に生れんと。読み上げ給ふ自然居士。墨染の袖を濡らせば。数の聴衆も色々の。袖を濡らさぬ人はなし。く。

ワキ詞

「かやうに候ふ者は。東国方の人商人にて候。我此

度都に上り。数多人を買ひ取りて候。又十四五ばかりなる女を買ひ取りて候ふが。昨日少しの間暇

を乞ひて候ふ程に遣りて候ふが。未だ帰らず候。

なふ渡り候ふか。昨日の幼き者は。親の追善とやらん申して候ひつる程に。説法の座敷にあらうずると存じ候。自然居士の雲居寺に御座候ふ程に。立ち越え見うずるにて候。

ツレ
「然るべう候。

ワキ
「や。さればこそ是に候。なふ急いで連れて御入り

候へ。

狂言 「やるまいぞ。

ワキ 「用がある。

狂言 「用が有らば連れて行け。如何に居士へ申し候。

シテ 「何事にて候ふぞ。

狂言 「唯今諷誦を上げて候ふ女を。荒けなき男の來り候ひて追つ立てゝ行き候ふ程に。遣るまじきと申し候へば。用があると申し候ふ程に遣りて候。

シテ 「あら曲もなや候。始めより彼女は様有りげに見え

て候。其上諷誦を上げ候ふにも。唯小袖とも書かず。身の代衣と書いて候ふよりちと不審に候ひしが。居士が推量申すは。彼者は親の追善の為めに。我身を此小袖に替へて諷誦を上げたると思ひ候。さあらば唯今の者は人商人にて候ふべし。彼は道理此方は僻事にて候ふ程に。御身の留めたる分にてはなり候ふまじ。

狂言 「人商人ならば東国方へ下り候ふべし。大津松本へ

某走り行き留めうずるにて候。

シテ
「暫く。御出で候ふ分にてはなり候ふまじ。居士此小袖を持ちて行き。彼女に代へて連れて帰らうずるにて候。

狂言
「いやそれは今日までの御説法が無になり候ふべし。

シテ
「いや／＼説法は百日千日聞し召されても。善惡の二つを弁へん為めぞかし。今の女は善人。商人は悪人。善惡の二道こゝに極まつて候ふは如何に。

今日の説法は是までなり。願以此功德普及於一切。我等与衆生皆共成。仏道修行の為めなれば。

地
「身を捨て人を助くべし。

ワキ
「今出でゝ其処ともいさや白波の。此舟路をや急ぐらん。

シテ
「舟なくとも説く法の。

地
「道に心を留めよかし。

シテ
「なふ／＼其御船へ物申さう。

「是は山田矢橋の渡舟にてもなき物を。何しに招かせ給ふらん。

シテ「我も旅人にあらざれば。渡りの舟とも申さばこそ。

其御舟へ物申さう。

ワキ「さて此舟をば何舟と御覧じて候ふぞ。

シテ「其人買舟の事ざふよ。

ワキ「あゝ音高し何とく。

シテ「道理々々。よそにも人や白波の。音高しとは道理

なり。人買と申しつるは。其舟漕ぐ櫂の事ざふよ。

ツレ「艤には唐艤といふ物あり。人買と云ふ櫂はなきに。

シテ「水の煙の霞をば。一霞二霞。一汐二汐などゝいへば。今漕ぎ初むる舟なれば。一櫂舟とは僻事か。

ワキ「實に面白くも述べられたり。さてく何の用やらん。

シテ「是は自然居士と申す説経者にて候ふが。説法の場をさまされ申す。恨み申しに來りたり。

ワキ 「説法には道理を述べ給ふ。我等に僻事なき物を。

シテ 「御僻事とも申さばこそ兎に角に。本の小袖は参らする。舟に離れて叶はじと。裳裾を波に浸しつゝ。

舟ばたに取り付き引きとゞむ。

ワキ 「あら腹立やさりながら。衣に恐れて得は打たず。

是も汝が科ぞとて。艦櫂を持つて散々に打つ。

シテ 「打たれて声の出でざるは。若し空しくやなりつらん。

ワキ 「何しに空しくなるべきと。

シテ 「引き立て見れば。

ワキ 「身には縄。

地 「口には綿の轡をはめ。泣けども声が出でばこそ。

シテ 詞 「あら不便の者や。やがて連れて帰らうするぞ心安く思ひ候へ。

ワキ 詞 「なふ自然居士舟より御おり候へ。

シテ 「此者を賜はり候へ。小袖を召され候ふ上は御損も

候ふまじ。

ワキ 「参らせたくは候へどもこゝに笑止が候。

シテ 「何事にて候ふぞ。

ワキ 「さん候我等が中に大法の候。それを如何にと申すに。人を買ひ取つて再び返さぬ法にて候ふ程に。え参らせ候ふまじ。

シテ 「委細承り候。又我等が中にも堅き大法の候。かやうに身を徒になす者に行き逢ひ。若し助け得ねば。

再び庵室へ帰らぬ法にて候ふ程に。其方の法をも破るまじ。又此方の法をも破られ申すまじ。所詮此者と連れて奥陸奥の国へ下るとも。舟よりはおりまじく候。

ワキ 「舟より御おりなくは榜訴を致さう。

シテ 「榜訴といつぱ捨身の行。

ワキ 「命を取らう。

シテ 「命を取るともふつゝと下りまじい。

ワキ 「何と命を取るともふつゝと下りまじいと候ふや。

シテ 「中々の事。

ワキ 「いや此自然居士に持て扱うて候ふよ。なふ渡り候ふか。

ツレ 「何事にて候ふぞ。

ワキ 「さて是は何と仕り候ふべき。

ツレ 「是は御帰しなうては叶ひ候ふまじ。よくく物を案じ候ふに。奥より人商人の都に上り。人に買ひ

かねて。自然居士と申す説経者を買ひ取り下りたるなどゝ申し候はゞ。一大事にて候ふ程に。御帰しなうては叶ひ候ふまじ。

ワキ 「我等も左様に存じ候ふさりながら。唯帰せば無念に候ふ程に。色々になぶつて帰さうするにて候。

ツレ 「尤然るべう候。

ワキ詞 「なふく 自然居士急いで舟より御上り候へ。

シテ 「いやく 聊爾には下りまじく候。

ワキ 「何の聊爾の候ふべき唯御上り候へ。

シテ 「あゝ船頭殿の御顔の色こそ直つて候へ。

ワキ 「いやちつとも直り候ふまじ。又是なる人の申され候ふは。今度始めて都へ上りて候ふが。自然居士の舞の事を承り及びて候。一指舞うて御見せあれと申され候。

シテ 「總じて居士は舞まうたる事はなく候。

ワキ 「それは御偽りにて候。一年今のが説法御述べ候

ひし時。いで聴衆の眠り覚まさんと。高座の上にて一指御舞ひ有りし事。奥までも其聞え候ふ程に。一指御舞ひ候へ。

シテ 「あうそれは狂言綺語にて候ふ程に。左様の事も候

ふべし。舞をまひ候はゞ此者を賜はり候ふべきか。

ワキ 「先づ御舞を見て。其時の仕義によつて参らせ候ふべし。是に鳥帽子の候。是を召して御舞ひ候へ。

シテ 「よくく物を案ずるに。終には此者を賜はらんず

れども。唯帰せば損なり。居士を色々になぶつて恥を与へうと候ふな。余りにそれはつれなう候。ワキ「何のつれなう候ふべき。

シテ「志賀辛崎の一つ松。

地「つれなき人の心かな。 (中の舞)

シテクリ「抑舟の起りを尋ぬるに。水上黄帝の御宇より事起つて。

地「流れ貨狄が謀より出でたり。

シテサシ「こゝに又蚩尤といへる逆臣あり。

地「彼を亡ぼさんとし給ふに。烏江といふ海を隔てゝ。攻むべき様もなかりしに。

クセ「黄帝の臣下に。貨狄と云へる士卒あり。ある時貨狄庭上の。池の面を見渡せば。折節秋の末なるに。寒き嵐に散る柳の。一葉水に浮びしに。又蜘蛛といふ虫。是も虚空に落ちけるが。其一葉の上に乗りつゝ。次第次第に筐蟹の。いとはかなくも柳の

葉を。吹きくる風に誘はれ。汀に寄りし秋霧の。

立ちくる蜘蛛の振舞。実にもと思ひそめしより。

巧みて舟を造れり。黃帝是に召されて。烏江を漕ぎ渡りて。蚩尤を安く亡ぼし。御代を治め給ふ事。

一万八千歳とかや。

シテ「然れば船のせんの字を。

地「公に前むと書きたり。さて又天子の御顔を。龍顔と名づけ奉り。舟を一葉と云ふ事。此御宇より

始まり。又君の御座舟を。龍頭鷁首と申すも。此御代より起れり。

ワキ詞「如何に申し候。我等が舟を龍頭鷁首と御祝ひ候ふ事過分に存じ候。とてもの事に彫を摺つて御見せ候へ。

シテ「さらば竹を賜はり候へ。

ワキ「折節船中に竹が候はぬよ。

シテ「苦しからず候。彼仏の難行苦行し給ひしも。一

切の衆生を助けん為めぞかし。居士も又其如く。身をこつかに碎きても。彼者を助けん為めなり。夫れさゝらの起りを尋ぬるに。東山に在る御僧の。扇の上に木の葉のかゝりしを。持ちたる数珠にてさらりくと払ひしより。さゝらといふ事始まりたり。居士も又其如く。さゝらのこには百八の数珠。さゝらの竹には扇の骨。おつ取り合はせ是を摺る。所は志賀の浦なれば。

地「さゝ波や。く。志賀辛崎の松の上葉を。さらりくとさゝらの真似を。数珠にて為れば。さゝらより猶手をも摺る物。今は助けてたび給へ。

「手を摺るなど、承り候ふ程に参らせ候ふべし。と

てもの事に羯鼓を打つて御見せ候へ。

地「もとより鼓は波の音。

（羯鼓の舞）

地「もとより鼓は波の音。寄せては岸をどうとは打ち。天雲迷ふ鳴神の。とゞろくと鳴る時は。降りく

る雨ははらくはらと。小 笹の竹のさゝらを摺り。
池の氷のとうくと。鼓を又打ちさらを猶摺り。
狂言ながらも法の道。今は菩提の岸に寄せくる。
船の内より。ていとうと打ち連れて。共に都に上
りけり。く。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第八輯』大和田建樹著